

# マンチェスターでの博士課程生活

-英文科大学院生の視点から-

## PhD Life in Manchester:

A Perspective from an English-Literature Student

マンチェスター大学英米学研究科博士課程 星野 真志

HOSHINO Masashi

(PhD Student, English and American Studies, School of Arts, Languages and Cultures,  
The University of Manchester)

キーワード：イギリス、博士課程留学



### はじめに——私がマンチェスターで研究することを決めた理由

個性豊かなイギリスの地方諸都市の中でも、イングランド北西部に位置するマンチェスターはとくに独特な存在感をもつ街だと言えるだろう。一般にはマンチェスター・ユナイテッドとマンチェスター・シティという2つの強豪クラブを有するサッカーの街として有名で、現に国立フットボール博物館という施設もある。また歴史に関心のある人にとっては産業革命を支えた工業都市として認知されているだろう。科学産業博物館、民衆史博物館、労働運動図書館など、産業史関連の施設も充実している。そして音楽ファンにとっては、ジョイ・ディヴィジョン、スミス、ストーン・ローゼズ、そしてオアシスなどのバンドを生んだロックの都として名高い（マンチェスターの音楽文化に関心がある



く似たような景観になっているとはいえ、やはりマンチェスターの赤煉瓦の街並みには、産業都市の名残の独特な魅力、良くも悪くも「汚らしさ」が残っているように思える。また現在のマンチェスターは様々な文化が混じりあう多文化主義的な街で、中心部には性的少数者の人たちが集う運河沿いの地区や、比較的大きな中華街もあり、少し中心から外れたところには「カーリー・マイル」と呼ばれる中東系のレストランや水煙草屋、ケバブ屋などが立ち並ぶ通りもある。こうした街全体のリベラルな雰囲気に加え、人口に占める学生の割合も3%と比較的高く、留学生にとっては非常に住みやすい街であると言えるだろう<sup>2</sup>。(悪名高い天気の悪ささえ我慢できれば、だが……。)

ただ、一つ留学生にとって大変かもしれないのは、やはり言葉である。よく日本人でアメリカ英語は聞き取れるけれどイギリス英語はよくわからないという人に会う。イギリス英語がわかりづらいとされている理由の一つは、方言の豊かさにある。ロンドンを中心とする南部とマンチェスターのある北部では、人びとの話し方がかなり違うのだ。しかも北部の中でも互いに大きく異なる。例えばマンチェスターから電車で一時間のイングランド北西に位置するリバプールの出身者の話し方はスカウス(Scouse)訛りと呼ばれ、かなり独特であり、北東イングランドのニューカッスルの人たちの話し方はジョーディー(Geordie)訛りと呼ばれ、こちらもまったく違う。マンチェスターの訛りはマンキューニアン(Mancunian)訛りと呼ばれ、先に挙げた二つほど際立った個性はないような気もするが、それでも日本人留学生にとっては相当厳しい。当然、大学などで聞こえてくる英語はある程度標準化されているので、マンキューニアン訛りをマスターする必要はないが、それでも街へ出れば、たとえばスーパー、病院、銀行、郵便局などで、地元の人と話さなければいけない機会は多い。とはいえマンチェスターの街の人たちは概して親切なので、それほど心配しなくても大丈夫かもしれない。イングランドには昔から南部と北部のあいだの分断があり、北部の人たちは南部の人たちよりも温かいという自負があるようだし、実際にマンチェスターの街の人たちは見ず知らずでもわりと話しかけてくれることも多い(少なくともロンドンや東京よりは)。南部で育ったジョージ・オーウェルが初めて北部に行って書いたルポルタージュの中で、「南部人が初めて北部へ行くときには文明人が未開人の中に飛び込んでいくような漠然とした劣等感を抱えている一方で、ヨークシャーやスコットランドの人たちは、略奪しに来た野蛮人のような気概でロンドンに来る」<sup>3</sup>のだと大げさに述べてから80年経ったが、いまだにこの分断は根強いようで、南部出身の私の友人は、マンチェスターに住んでいると地元の人ほどフレンドリーでない自分に嫌気がさすと、冗談めかして言っていた。そういうわけで、街の人た

<sup>2</sup> たとえば2016年の‘QS Best Student Cities Ranking’では、マンチェスターは全体36位、イギリス国内3位と位置づけられている。

<https://www.topuniversities.com/university-rankings-articles/qs-best-student-cities/manchester>

(2017年2月5日アクセス。)

<sup>3</sup> George Orwell, *The Road to Wigan Pier* (London: Penguin, 2001), pp. 101-102. 翻訳は筆者。

ちと話しているうちに、聞き慣れない訛りにも慣れてきて、やがて親密さを感じるようになる。多くの留学生は一年しか滞在しないため訛りに慣れる頃には帰国してしまうが、私にとっては、帰国後には街の人たちの話し方も恋しく思い出されることと思う。

## マンチェスター大学

マンチェスター大学は、一箇所に集中した大学（つまりロンドン大学のように複数のカレッジをもつものや、オープン大学のような通信制を除く）としてはイギリス最大で、2014年度の学生数は38,590人、そのうちEU域外からの学生数は10,060人、EU域内からの留学生数はあきらかにされていないが相当数いることを考えて、3分の1程度が留学生である総合大学である<sup>4</sup>。大学付属の病院や博物館、美術館などもある<sup>5</sup>。さらには日本の大学では考えづらいことに、バーやライブハウス、クラブなどもあり、世界的に有名なミュージシャンがツアーで回ってきたりもする（悲しいことに学生割引はなく、ほとんど民営の施設と変わらないのだが）。また日本語学科があり、その学生たちは日本への交換留学が義務付けられていることもあり、代わりに日本人留学生を多く受け入れている。修士課程ではビジネスや開発学を学ぶために留学している日本人学生が多い。とくに開発学は、日本ではあまり盛んではない分野という印象だが、マンチェスター大学は国際的な大学ランキングなどを見ても非常に高く評価されているようだ。

## 院生生活

ほとんどのイギリスの博士課程と同じく、私のコースは3年間で、ゼミや授業に出る必要はなく、独立した研究をおこない博士論文を仕上げることを求められる。理系の場合は研究室にこもって研究をするのかもしれないが、私のように本とパソコンさえあれば論文が書ける分野の人にとっては、完全に自己の裁量で3年間の研究生活を過ごすことになる。私の学科では、最低月1回以上指導教員と面談をおこない研究の進捗を報告することが義務付けられており、また各学期末に指導教員、副指導教員、学科の教員の中から選ばれた独立審査員の3人を呼んで口頭審査を受け、博士号取得の見込みがあるかを審査されることになるが、それ以外は完全に自由だ。したがって生活パターンは個々人によって大きく異なり、同じ学科の院生同士でもなかなか顔を合わせることがない。とはいえ、もちろん学科内で勉強会などが頻繁に開催されており、関心の近い研究者同士のネットワークはある。たとえば私の所属する英米研究科では、毎週水曜日の夕方からセミナーが行われ、院生や教員、他の大学からのゲストなどが研究発表をおこない、その後は懇親会が開かれる。そのほかにも、大きな大学で

<sup>4</sup> <http://www.manchester.ac.uk/discover/facts-figures/>（2016年10月15日アクセス。）

<sup>5</sup> マンチェスター大学附属ウィットワース美術館は水彩画のコレクションが有名で、2012年には渋谷のBunkamuraでの英国水彩画展に協力したことで知られる。

あることの利点を生かして、一つの分野にとどまらない学際的な研究会や講演会が頻繁におこなわれている。しかしこれらのイベントへの参加は任意なので、博士課程の院生はほとんどほったらかしにされ、ひたすら資料収集と執筆に励むことになる。もちろん、このような自由に埋もれてしまわないように、前述のように定期的に研究の進捗状況を報告することが事細かに定められており、ほとんどの院生は最終期限とされている4年以内に博士論文を提出する。

## 日英の違いについて考える

日英の博士院生が置かれた状況の違いは一考に値する。これ以降は、私が知る限りの範囲での話なので、主に文系の場合についてということでお読みいただきたい。おそらく日本国内でも文系博士院生がどのような生活を送っているのかは一般にはあまり知られていないだろうし、大学や専攻によってそれぞれだろうが、おそらく多くの場合はゼミに出る義務があり、博士課程でも単位を取る必要があるだろう。そして人によっては非常勤講師やTAをしながら、バイトを掛け持ちして、というように忙しい生活を送っている（私も日本にいたときにはそうだった）。そのせいもあってか、日本では博士論文にける時間が長くなり、短くても大体5年くらいはかかるのが普通かと思う。このことは、当然カリキュラムの違いや学会において博士号のもつ意味の違いなどもあるだろうが、それ以外にも、日本では博士の院生に対する給付型奨学金などの経済的支援が比較的少ないということも一つの原因なのではないだろうか。日本にもJASSOの第一種奨学金の業績優秀者への返還免除制度や、まさに私が利用している海外留学支援制度、そして日本学術振興会の特別研究員制度などがあり、一部の院生は経済的に比較的安定した状況で研究に励むことができるが、大半の博士課程の院生が給付型奨学金を受けながら研究をしているイギリスの状況を見てみると、やはり日本の若手研究者支援についてはまだ拡充の余地があるのではないかと感じる。

ただ、この問題は日英の学術研究をめぐる状況のより大きな違いの氷山の一角なのかもしれない。私はイギリスに来てから、日本よりも大学と社会が近いように感じる事が度々ある。たとえば飲み屋で会った人と話していて、博士課程の院生だと言ったら研究テーマを説明させられたことが何度かあるし、そのうち一度などは、君の仮説はおかしいとなぜか散々に批判された（苦笑）。つまり、研究者でなくても研究に興味をもってくれる人が多い気がするのだ（当然、イギリスに来てイギリス文学のことを研究しているので、とっつきやすいということはあると思うが）。研究者が大学の外で講演をする機会も多いように思う。たとえばマンチェスターにはHOMEという映画館・劇場・ギャラリーなどの複合施設があるのだが、そこでは映画の上映前に専門の研究者によるイントロ（スペイン映画ならスペイン文化研究者、日本映画なら日本文化研究者、といった具合に）がおこなわれることも多い。学術的なイベントを大学外の公民館や博物館などで開催し、在野の研究者や一般人の参加を募ることもある。もちろん日本でもこのようなイベントは行われていると思うし、イギリスの中でもマンチェ

スターが特殊である可能性はあるが、それでも全体的に、イギリスの方が大学での研究が地域の住民たちに受け入れられていく間口が広いように感じる。

このことに関連して、一つ面白い体験をした。私は日本にいたときから、ウェールズ出身の思想家レイモンド・ウィリアムズを研究する会に参加しており、2016年の3月には、日本のウィリアムズ研究会とウェールズのスウォンジー大学の研究グループが、共同でウィリアムズに関するシンポジウムをおこなった。せっかくの機会ということで、ウィリアムズの生家のある、イングランドとウェールズの境界に近いパンディという小さな村の公民館が会場に選ばれた。そして当日になってみると、驚くべきことに、会場には大学と関係のない多くの地域住民の姿があった。普段は同業の研究者を相手に話すことに慣れてしまっていた私にとってはなんとも不思議な体験で、自分の発表の際にはやりづらさも感じたが、同時に自らの研究を大学の外の人たちと共有できることには喜びも感じた。これは特殊な例かもしれないが、学術研究と地域住民のつながりを示す例としては興味深いと思う。

こうしたことを考えると、イギリスでは学術研究に対するある種の信頼が、市民のあいだに根付いているように思う。それは、大学が市民への成人教育——前述のレイモンド・ウィリアムズや、私の指導教員のハーカー先生など、少なからぬイギリスの知識人が成人教育に携わった経験をもつ——などを通じて、大学の外に研究成果を還元してきた伝統の上にあるのではないか。私の学科でも、院生が大学外の市民に向けて研究内容を発表する場が定期的に設けられている。しかし、イギリスの高等教育をめぐる状況も良いことばかりではなく、たとえば、授業料の値上げと学部レベルでの給付型奨学金の不足は多くの大卒者に多額の借金を背負わせ、教育格差を広げている<sup>6</sup>。新自由主義的な改革により大学が市場の論理に翻弄されつつあるこのような状況で、イギリスの高等教育が社会からの信頼を守りきれののかも雲行きがあやしい。それでも日本としては、イギリスの状況から学ぶところはあるように感じる。この留学を通じて、学術研究への信頼を取り戻すにはどうすべきなのかということ、一研究者としてこれからも考えていきたい。

<sup>6</sup> たとえばマンチェスター大学のEU域内からの学部生の年間授業料は£9000ポンドで、£1=¥150としても¥1,350,000になる。これと生活費をまかなうために、多くのイギリス人学生は利子付きの学生ローンを借りている。『ファイナンシャル・タイムズ』の記事によると、イギリスの大学生は卒業時にアメリカの学生よりも借金を多く抱えており、その額は多い場合は£50,000以上になるという。‘UK graduates leave university with more debt than US peers’, *Financial Times*, April 28, 2016. <https://www.ft.com/content/a1c27f38-0c86-11e6-b0f1-61f222853ff3> (2017年2月3日アクセス。)